

# 獣種ごとのモニタリング調査の手法とその特徴

一般財団法人 自然環境研究センター 荒木 良太

## ■分布に関するモニタリング調査

狩猟鳥獣であるニホンジカやイノシシは報告義務のある捕獲位置情報が分布のトレンドを示す情報の一つとして活用できるが、非狩猟鳥獣であるニホンザルの場合、アンケート調査等の別途調査が必要となる。

## ■被害状況等に関するモニタリング調査

定量的調査方法は長らく検討課題として扱われてきたが一部を除き未だ定型の調査方法はないのが現状である。一方、農業集落アンケートによる被害状況調査は他種を対象として実施されており、自給的農家も対象とした被害意識を反映する指標として西日本で用いられつつある。

## ■個体数（生息密度）に関するモニタリング調査

- 多くの場合、サンプリング調査が基本となる。
- 調査手法（網羅される調査地の大きさ）によって測定される生息密度・生息数は過大・過小となるため、種毎の行動圏の大きさに応じた手法の選択が重要である。
- 種ごとの生態的特性・管理施策の状況・生息環境の要因により、直接観察が可能なもの、難しいものがあるため、各要因に応じた手法の選択が重要である。

## ●種別の主な調査方法に関する留意点

### ・ニホンジカ

：高い季節的定住性、比較的狭い季節的行動圏、母系・親子単位といった特徴から、サンプリングを基本とした直接観察・間接調査が可能だが、捕獲圧が高まってきている地域では間接調査（またはカメラ調査）が適切な手法と考えられる。

### ・イノシシ

：直接観察が難しく、生息数（密度）の調査方法に乏しい。また、生息数の経年変化が大きいため、年変動が大きい生息数を知る意義を十分認識する必要がある。

### ・ツキノワグマ

：行動圏大きいことに加え、比較的低密度であるため、調査規模が大きくなりがちであるので、隣接県や関係機関との連携した調査の実施が重要となってくる。

### ・ニホンザル

：群れサイズが大きく、群れ単位での行動を行い、昼行性であるといった特徴から、センサス（全数調査）が基本となる。住民の協力により実施する調査法もあるが、その場合、状況を把握できる地域が里地に偏りやすい。モニタリングの対象が管理目的か保全目的か意識することが必要である。